

## 報告要旨

「今次の一連の危機と銀行機密への圧力を受けて～スイスの銀行部門の動向」

藤田憲資(保健医療経営大学)

今次の一連の危機は、スイス経済にも様々な影響を及ぼした。その1つが、危機に伴い財政バランスの悪化した先進諸国が、脱税対策の一環として行ったスイスの「銀行機密」への圧力である。そして、最近、かかる動きを受けて、スイスの銀行から資金の流出が相次ぎ、とくに、それがシンガポールに向かっているとの指摘を目にする。なかには、こうした観点から派生して、スイスの金融機関や、その資金預け先としての魅力について悲観的な展望を述べるものもある。しかし、それら先行研究の中には裏付けとなる分析が不十分なものも少なくない。

そこで、本報告では、そうした指摘を1つの手がかりにしつつ、一連の危機から「銀行機密」への圧力という環境の変化が、スイスの銀行に及ぼした影響の一端を以下の諸課題を検討することを通じて探っていきたい。まず、スイスの「銀行機密」への圧力を4つの側面から検討し、次に、スイスの銀行部門の動向を、スイスの銀行の対外取引、ないしスイスの主要各行の対応といったマクロおよびミクロの両側面から明らかにする。その際、シンガポールとの関係についても必要な限りで触れることにしたい。このうち、スイス所在銀行の地域別取引は、先行研究でもあまり示されていないことから、本報告の主たる意義と言ってよい。

かかる検討を通じてわかったことは、およそ次の3つである。第1に、スイスの「銀行機密」は、多方面からの圧力を受けて、徐々に緩和される方向にあるが、口座情報の自動的な交換についてはスイス政府も頑なに拒否している。加えて、議会第1党の国民党や、多くの国民は「銀行機密」の堅持を支持しているため、少なくとも現時点で「銀行機密」に関する規定を大幅に改定することは容易ではない。

ついで、第2に、スイスの銀行の対外取引を、金融収支や取引通貨、さらには銀行の国籍や地域別取引といった諸側面からみると、危機に伴うリスク回避もあって、概して、スイスの銀行への流入超過にある。このうち、スイス所在銀行とシンガポールとの近年の取引をみると、シンガポールへのグロスの流出は増加しているものの、その規模は大きなものではない。さらに、ネットで見ると、その規模はより小さなものであるか、またはスイス所在銀行への流入超過であった。この限りで言えば、スイス所在銀行からの資金流出が相次ぎ、それがとりわけシンガポールに向かったとする一部の指摘は、実態を多少誇張しているとみてよい。

および、第3に、スイスの主要各行が、現在、富裕層を対象にした業務にこれまでよりも力を入れ、同部門で米国の銀行とトップを争っていることや、資金の預け先として、スイスは、オフショア金融センターの中でもトップにあり、シンガポールと香港を合わせてもスイスの半分程度の規模にすぎないことを指摘した。この限りでいえば、スイスの金融機関や、その資金預け先としての魅力について、少なくとも現時点で悲観的な見解を示すことは早計であると考えられる。

かくして、スイスの「銀行機密」は大きな圧力を受け、スイスからシンガポールへのグロスの資金フローが、規模は小さいながらも近年増加していることは一部の指摘にあるとおりである。しかし、実態を詳しくみると、この他の点については、上記のごとく、誇張や、異なる結果もみられた。